

清須ゆかりの作家 阿野義久展 生命形態 —日常・存在・記憶—

2022年9月10日（土）～11月13日（日）

清須市はるひ美術館

作品リスト

No.	作品名	制作年	材質	サイズ (cm)
1	HITO	2011	油彩、キャンパス	91×60.6
<p>トルソ。おもに彫刻作品に使う用語で、人間の胴体像を意味する。胴は脊椎で全体を支え、四肢をつなぐ、文字通り人体の根幹である。日本で美術の道を志す者の多くは、基礎教育の過程において石膏で作られたトルソ像をデッサンし、人体の構造や基軸のバランスなどを学ぶ。</p> <p>1980年代に学生時代を過ごした阿野も、例にもれずトルソをはじめとする人体デッサンに取り組むことになるが、その経験はまず立体作品に昇華された。</p> <p>人の形そのものに対する関心が源にあるが、人体と呼ぶにはあまりにも抽象的だ。肉体というよりかは、内臓や骨を想像するかもしれない。あるいはもっとそぎ落とされた形状は、植物や昆虫、海洋生物など原始的な生物を思わせる。人間に限らず、いきものの形態は左右対称性と少しの歪みを有していることが多い。阿野がとらえようとしたのは、生命の本質的な造形と言えるだろう。</p>				
2	作品Ⅰ	1985	針金、膠石膏、ガーゼ、リンシードオイル、コーキング材、顔料	176×35×14
3	作品Ⅱ	1985	針金、膠石膏、ガーゼ、リンシードオイル、コーキング材、顔料	195×29×13
4	作品Ⅲ	1985	針金、膠石膏、ガーゼ、リンシードオイル、コーキング材、顔料	196×28×12
5	作品B	1988	流木、廃材、布、クラフト紙、コーキング材、顔料	205×49×27
6	作品A	1988	流木、廃材、布、クラフト紙、コーキング材、顔料	185×50×25
7	種	2003	木製ボックス、再生紙	164×74×8
8	作品	2002	クラフト粘土、木材、アクリル塗料、鉛筆	42×27×9.5
9	無題(トルソ)	1990	油彩、キャンパス	224×162
10	人のカタチ	1984	水彩、紙	51×35
11	人のカタチ	1984	コンテパステル、紙	51×35
12	人のカタチ	1984	水彩、紙	51×35
13	人のカタチ	1984	コンテ、紙	51×35

2001～2002年にかけてイタリアやスペインに滞在した阿野は、そこで公園の樹木をスケッチすることに魅了される。それまで形を塊(マッス)で把握していたが、一定方向に伸びていく幹や枝葉を線的にとらえることで、改めて絵画について見つめ直す契機になったという。

有機体が備える水平／垂直軸や対称性、リズムカルに反復する形状などの特徴は、給水塔やガスタンクといった巨大な建造物に転化されていく。それらは本来自然とは対極にある人工物であるが、生産と備蓄、増殖のサイクルは生命の根源的な営みに重ね合わせることもできよう。球体のさび跡は果実の模様に、煙の排出は呼気になぞらえ、非人間的とも言える光景に生命の存在を宿す。

No.	作品名	制作年	材質	サイズ (cm)
14	冬景	2003	油彩、キャンパス	162.1×162.1
15	稜線	2001	鉛筆、紙	21×28
16	稜線	2001	鉛筆、紙	21×28
17	木のカタチ	2001	鉛筆、紙	28×21
18	木のカタチ	2001	鉛筆、紙	28×21
19	木のカタチ	2001	鉛筆、紙	28×21
20	木のカタチ	2001	鉛筆、紙	28×21
21	cactus	2001	鉛筆、紙	39.3×29.8
22	栗の老木	2001	鉛筆、紙	39.3×29.8
23	尖塔	2001	インク、紙	28×21
24	尖塔	2001	インク、紙	28×21
25	CASTEL DE PALMA DE MALLORCA	2001	油彩、キャンパス	100×65.2
26	CASTEL DE PALMA DE MALLORCA	2001	油彩、キャンパス	100×65.2
27	ARBRE DE OLIVA	2001	油彩、キャンパス	100×65.2
28	ARBRE DE OLIVA	2001	油彩、キャンパス	100×65.2

No.	作品名	制作年	材質	サイズ (cm)
29	Towers of Plant	2004	油彩、キャンパス	181.8×227.3
30	Towers of Plant Feb'06	2006	油彩、キャンパス	162.1×162.1
31	Towers of Plant JAN'05	2005	油彩、キャンパス	162.1×162.1
32	TANKS	2010	油彩、キャンパス	162×162
33	臨海都市	2010	油彩、キャンパス	162×162
34	工業地帯	2009	油彩、キャンパス	162×162
35	石積み	2001	墨汁、紙	42×59
36	石積み	2001	墨汁、紙	59×42
37	オリーブの木	2001	墨汁、紙	59×42
38	石積み	2001	墨汁、紙	42×59
39	two huts	2015	油彩、キャンパス	45.5×53
40	hut	2016	油彩、キャンパス	45.5×53
41	seed stock	2020	油彩、キャンパス	45.5×38
42	STREET CORNER	2018	油彩、キャンパス	24.2×33.3
43	STREET CORNER	2018	油彩、キャンパス	24.2×33.3
44	shack	2018	油彩、キャンパス	24.2×33.3
45	木立	2022	油彩、キャンパス	72.7×53

不-自然な人工物、つまり非日常的な異物に生命の存在を見いだしていた阿野だが、近年は具体的な植物や故郷の風景を描くことに関心が移行している。年齢を重ね、幼いころの原体験に非日常性を感じるようになったからだという。阿野の記憶から生成されたこれら心象風景は牧歌的で、明るい色彩が厚く塗りこめられ、表面をひっかいたような身体性を感じる描写跡もみえる。植物ひとつひとつが標本のように並べられたイメージは、幼少期の幸福感や無邪気さを体現しているかのようだ。

一貫して描いてきた生命の形は、現実世界だけでなく精神世界からも呼び起こされた。醸成された古い記憶を土壌に、新たないのちが芽吹いてゆく。

No.	作品名	制作年	材質	サイズ (cm)
46	蒼風	2020	油彩、キャンパス	130.3×162
47	薫風	2021	油彩、キャンパス	130.3×162
48	植物図譜	2022	油彩、キャンパス	162×162
49	蒼風	2021	油彩、キャンパス	116.7×116.7
50	花曇り	2020	油彩、キャンパス	45.5×53
51	植物界	2022	油彩、キャンパス	38×45.5
52	叢生	2020	油彩、キャンパス	15.8×22.7
53	植物界	2022	油彩、キャンパス	45.5×53
54	黄色い花	2018	油彩、キャンパス	45.5×53
55	早春	2022	油彩、キャンパス	41×31.8
56	黄色い花	2022	油彩、キャンパス	31.8×27.3
57	叢生	2020	油彩、キャンパス	15.8×22.7
58	青い花	2021	油彩、キャンパス	45.5×53